島根県立三刀屋高等学校
校長発 『本流』
【１１月号】令和５年１１月２２日

■「古希」と「百寿」－ANNIVERSARY－

日本には、人生で大事な節目の歳に達したことを祝う「歳祝い」と呼ばれる慣習があります。「歳祝い」には、還暦（かんれき・61 歳）、古希（こき・70 歳）、喜寿（きじゅ・77 歳）、傘寿（さんじゅ・80 歳）、米寿（べいじゅ・88 歳）、卒寿（そつじゅ・99 歳）、百寿（ひゃくじゅ・100 歳）などがあり、その後の人生の無病息災・健康長寿を祈願するものです。もちろん、毎年やってくる誕生日も「お祝い」ですよね。齢（よわい）を重ねてくると「誕生日が来るのは（１つ歳をとったということだから）嬉しくない。」という人もいますが、日々の慌ただしさからちょっと抜け出して、今いる自分を見つめなおすよい機会だと思います。そこでは、感謝や喜びといった感情と後悔や悲しみといった感情とが入り混じった複雑なものになりがちです。それでも、人生の要所要所で一休みして日々走り続けてきた自身の道程を振り返ってみることは、今後の進むべき道を決定していく上で必要なことだと思います。

人生は、その時々の選択の連続です。「あの時こうしておけばよかったかな？」「こちらを選ばなかったらどうなっていたかな？」とその時々の選択が正しかったのかどうかについて悩むこともあります。できることならあの日に戻ってやり直したいと思う気持ちは、多かれ少なかれ誰にでもあると思います。過去に行ったその時々の選択を変えることはできません。できるのは、その時々の状況を思い起こして「あの時はあの時でしっかり考えて選択したんだよな。」という過去の自分との“向き合い”と、今選択すべき状況に直面している現在の自分との“向き合い”です。「歳祝い」や誕生日には、これまでの自分を肯定し、これからの自分の道を切り拓いていこうとする、その心理的整理作業の側面もあるのではないでしょうか。もちろん、社会的に誤った選択をした場合などは、その反省を今後の人生に反映させていかねばなりませんが。

彫刻家で詩人の高村光太郎は『道程』（発表初期のもの）の冒頭でこう詩っています。

どこかに通じてゐる大道（だいどう）を僕は歩いてゐるのぢやない
僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
道は僕のふみしだいて来た足あとだ

先日 11 月 11 日（土）に、掛合（かけや）分校創立 70 周年記念式典を行いました。当日は、丸山達也島根県知事、石飛厚志雲南市長をはじめ多くの来賓の皆様をお迎えし、盛大に掛合分校の創立 70 周年を祝いました。人生に例えれば「古希」のお祝いとなります。

来年４月 17 日（水）には、三刀屋（みとや）高校の開校 100 周年記念式典が予定されています。こちらは「百寿」のお祝いとなります。それぞれの学校が、歩んできた道程を顧みてその先を目指して進んでいきます。新たな学校の歴史を創造すべく、その道をともに歩いていきましょう。

【島根県立三刀屋高等学校掛合分校】

1953（昭和 28）年４月１日「働きながら学ぶ定時制課程の農業科及び家庭科」定員 50 名で発足しました。出雲国風土記にいう掛合村佐長里（さながのさと）とあるこの地において、終戦の頃からの「山間地域の開拓にあたる青年を養成したい」という地元の強い要望を受け、当時の掛合町・吉田村有志の根気強い請願が結実したものでした。当時、教職員の人件費以外はすべて地元負担という厳しい条件にもかかわらず、何とかして地元青年に教育の機会を保障しようという熱い思いのあらわれでした。当初は校舎がなく、小学校の後方の新制中学の校舎として昭和 24 年に増築された３教室を仮校舎として、５月１日に入学生２６名で開校しました。1963（昭和 38）年には定時制課程の募集を停止し、全日制課程普通科に切り替わり、創立 10 周年を記念して学園歌も制定されました。「掛合 掛合 掛合高校」と学園歌で歌われるとおり、掛合分校は「掛合高校」　愛称「掛高」として、生徒・保護者の皆様はもとより、地域の皆様から愛される高校として今もこの「さながの丘」にあります。1982（昭和 57）年に島根県で開催された「くにびき国体」では、掛合町が会場となった相撲競技でベスト８進出を果たすなど、かつて相撲部は全国総体の常連校でした。また、昨年度「走れ！山月記」を演じた演劇同好会は、一人芝居ながら中国大会３位入賞を果たしました。活動の様子を追ったドキュメンタリー映画は、現在でも全国各地で高い評価を得ており、「掛高」の認知度もますます高まっています。

掛合分校は、「掛高には本物がある」というキャッチフレーズのもと「本物の少人数教育」「本物の地域密着」をその両輪として教育活動にあたっています。分校としては島根県内唯一の学校となりましたが、今では「掛高で学びたい」と入学を希望する中学生も増加傾向にあり、その存在意義の高まりをひしひしと感じているところです。